

琵琶湖南湖の窪地における延縄でのオオクチバス捕獲状況

田口貴史・石崎大介・根本守仁

1. 目的

これまでの調査で琵琶湖南湖では春季には刺網によるオオクチバス（以下、バス）親魚の捕獲効率が低下することが明らかとなったことから¹⁾、春季以降の刺網に代わる駆除手法として延縄を検討し、その特性を把握する。

2. 方法

本報告別項の草津市矢橋町沖の窪地¹⁾で2020年4～6月と12月から翌年3月にかけて図1の規格の延縄での捕獲試験を実施した。延縄の餌には全長約10cm程度の生きたゲンゴロウブナを用い、窪地の東西端それぞれに南北方向に延縄1鉢（60針、ただし5～6月の調査時は半数の30針とした）を一昼夜設置した（1調査あたり合計で60～120針）。調査日ごとの60針あたりの捕獲魚数（CPUE）を比較するとともに、バス以外の魚種の混獲状況を記録した。

3. 結果

延縄での調査日ごとのCPUEを図2に示す。4月の調査開始当初には13尾/60針とCPUEが高かったが、その後、徐々に低下し、6月には3尾/60針となった。その後の12月の調査ではCPUEが再び増加し、12～16尾/60針と高くなった。1～2月にかけては低下したものの、3月には調査全体を通じて最高の21尾/60針を記録した。

混獲状況については、合計960針でバス179尾（計344.5kg）が捕獲されたのに対し、その他魚種はナマズ5尾、ビワコオオナマズ1尾、ブルーギル1尾であった。

以上の結果から、生きたフナを餌に用いた延縄は琵琶湖南湖でのバスの選択的な捕獲に有効で、特に春季と初冬の時期に効率的であ

ると考えられる。

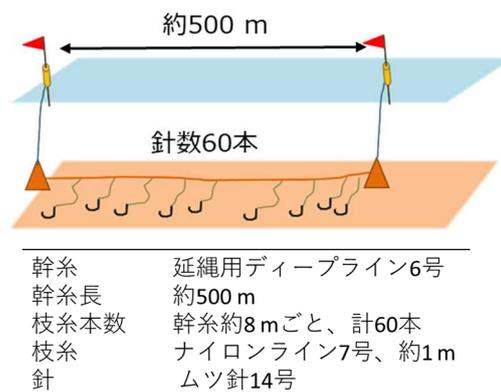


図1 調査に使用した延縄の模式図と規格

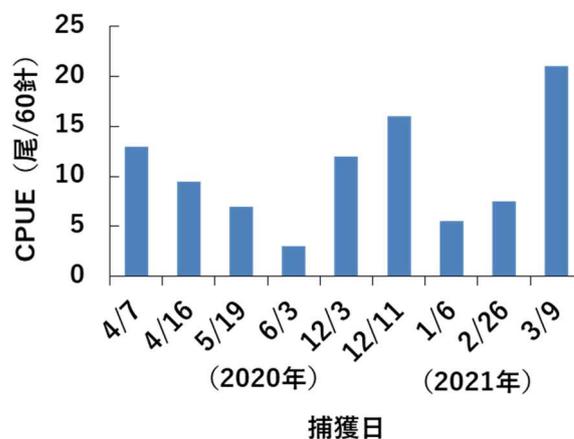


図2 矢橋沖窪地での調査日ごとのオオクチバス CPUE の変化

1) 本報告の「琵琶湖南湖の窪地における大型目合の刺網でのオオクチバス捕獲状況」を参照。
*本報告は水産庁からの委託事業「効果的な外来魚抑制管理技術開発事業」の成果の一部である。